

# 広島大学マスターズ広島第6回ミニ懇話会 『原子雲の下で—大田洋子・原民喜・栗原貞子・峠三吉—』

日 時： 2026年2月28日(土) 15時15分～16時45分(15時開場)  
場 所： 広島大学東千田キャンパス未来創生センター3階 M302 講義室  
講 師： 岩崎文人 (広島大学名誉教授、元教育学研究科・教育学部)

## 【概 要】

1945年8月6日、広島に原爆が投下されてから80年が経つ。が今日なお、ガザ地区、ウクライナが戦場となっており、世界は未だ核兵器使用の危機から脱していない。人類史上未曾有の非人間的、非人道的悲惨を描いた原爆文学を改めて読み返し、背後にある平和への祈りについて考えてみたい。

原爆文学は、最初、直接被爆した文学者の手によって書かれていく。原民喜「夏の花」(1947年)、大田洋子『屍の街』(1948年)などである。その後、被爆はしていないものの、被爆国の文学者としての使命感に突き動かされるような形で書かれたのが、阿川弘之『魔の遺産』(1954年)、大江健三郎『ヒロシマ・ノート』(1965年)、井伏鱒二『黒い雨』(1966年)などである。

懇話会では、直接被爆した広島の文学者に焦点を当て、原爆文学の出発とその時代、原爆文学の今日的意味などについて話をしてみたい。

## 【講師プロフィール】



◆専門分野：日本近現代文学

◆研究テーマ：文学に描かれた地方と都会、原爆文学

◆略歴：1944年 岡山県に生まれる、1969年 広島大学大学院文学研究科修士課程修了後、広島文教女子大学助教授などを経て、1987年 広島大学学校教育学部助教授(のち教授)。1998年～2002年、広島大学付属三原幼稚園長、付属三原小・中学校長を併任。2001年 広島大学大学院教育学研究科教授。2008年 広島大学定年退職(広島大学名誉教授)。2014年から2025年3月までふくやま文学館館長。

◆著書：『一つの水脈—独歩・白鳥・鱒二—』(溪水社、1990年)、『広島文学』(同、1991年)、『原民喜 人と文学』(勉誠出版、2003年)、『広島県現代文学事典』(編著、勉誠出版、2010年)など。

【問い合わせ先】 広島大学マスターズ広島 総務担当幹事 椿 康和

E-mail: tsubaki3@mub.biglobe.ne.jp、 Tel. 090-5261-8324

事前の申込み不要で、広島大学マスターズ広島の会員に限らずどなたでも参加可能です。ただし、自家用車でご来場された場合、20分を超えると駐車料金が有料となりますのでご注意ください。